

2011年独立行政法人水産総合研究センターの主な出来事

今年一年を振り返り、センターの活動やこれまでプレスリリースなどでお知らせした
ものから、主なニュースや社会的に反響の大きかった出来事についてとりまとめまし
た。

○ 東日本震災の発生。復旧・復興の支援に全力で取り組む。

- ・3月11日に東日本大震災が発生、センターは、宮古栽培漁業センターが津波により全壊、東北
区水産研究所塩竈庁舎、八戸庁舎、水産工学研究所で施設・建物、実験機器などに大きな被害、
調査船「若鷹丸」が損傷した。人的被害はなかった。
- ・被災地への物資輸送に協力。
- ・震災直後に水産庁とともに漁港、漁船の被害状況調査を実施。
- ・「水産業復興・再生のための調査・研究開発推進本部」を設置、活動を本格化。
『「サケふ化場復旧のためのパイロット調査」などで東北地方のサケ増殖事業の復旧に尽力』、
「三陸沿岸のアワビ、ウニへの津波の影響調査」、「小型調査艇「いそなみ」を派遣し、カキ
の浮遊幼生調査等を実施」、「海中のがれき調査と音響調査による調査法の情報提供」、「水
産資源の状態の把握」、「東北地方におけるサケ漁業と増殖事業の復旧状況のとりまとめ」、
「福島県への漁業調査船「こたか丸」の派遣」、「三陸沖操業の近海かつお釣船に活餌のカタ
クチイワシを供給」など。今後、補正予算の復興関連プロジェクトに参加、引き続き調査研究
を行うとともに、アワビやヒラメの種苗生産にも協力して行く。
- ・水産庁の要請を受け水産物の放射能調査を実施、結果をホームページで公表中。放射性物質分
析法の講習会を開催するなど、関係県・機関と連携して水産物の安全安心の確保に努力。
- ・放射性物質対策のための農林水産省（農林水産技術会議、水産庁）事業を受託、水産物中の体
内動態や海洋中の動態について研究を実施中。
- ・連携協力協定を行っている大学と共催で特別シンポジウム「東日本大震災からの水産業の復興
と新たな歩みー研究開発の立場からの支援ー」を12月8日に開催。

○ 第3期中期計画期間開始

農林水産大臣から新たな中期目標が示されたことを受け、23年度から27年度までの5カ
年間の第3期中期計画を策定し、4月1日から業務を開始した。

業務を効果的かつ効率的に推進するために、9研究所と10栽培漁業センターの組織の一元
化、研究所とさけます事業所の組織の一元化、本部組織の改組など最適な組織体制に再編、9
月には遠洋水産研究所を国際水産資源研究所に改組した。水産業を取り巻く課題及び水産行政
上の喫緊の課題に的確かつ効果的に対応するため、研究開発を5つの柱に重点化して実施して
いる。

○ 大学との関係を強化。4大学と包括連携協力の推進に係る協定を締結。

北海道大学大学院水産科学研究院（3月29日）、長崎大学（7月8日）、横浜国立大学（8
月9日）、東京大学（10月28日）と包括連携協力の推進に関わる協定を締結、関係を強化
した。

12月8日に、21年に協定を結んだ東京海洋大学を加えた5機関との共催で、シンポジウ
ムを開催した。

○ 研究開発が引き続き進展（発表日順）

・「天然ウナギ卵の採集に成功」（2月2日発表）

天然ウナギ卵 31 粒を西マリアナ海嶺南端部で採集することに世界で初めて成功。東京大学大気海洋研究所との共同研究。

・「マイワシ太平洋系群 2010 年生まれは卓越年級群」（6月6日発表）

太平洋系群の秋季沖合域の資源評価調査により、2010 年生まれのマイワシが多く生き残っており、これは近年では卓越している数であることが判明した。

・「有明海・八代海のシャトネラ等有害赤潮プランクトン分布情報の公開」（6月21日発表）

有明海・八代海で関係機関が収集している赤潮原因プランクトンの分布データを、地図上でわかりやすくリアルタイムで表示するシステムを開発し、5月27日より公表を開始した。赤潮被害防止の有力な情報として、現場の関係者に好評を得ている。

・「西表島近海の禁漁区がナミハタの重要な産卵場であることを確認—水中カメラで産卵の瞬間の撮影に成功—」（7月6日発表）

八重山地方で漁獲されるナミハタの産卵は自主禁漁区内で行なわれること、一年のうちでも限られた日である産卵日の数日前から親魚が産卵場に集結すること、産卵の時間帯は午後 11 時過ぎからの数十分以内であることが判明、ナミハタの卵と思われる大量の魚卵の採集にも成功。地元漁業関係者による自主禁漁の有効性を証明した。

・「クロマグロ稚魚が活発に食べる配合飼料を開発」（9月29日発表）

クロマグロ稚魚（全長 25~120mm）を対象とした配合飼料を世界に先駆けて開発した。マグロ稚魚の嗜好性を向上させる食感を追求し、抜群の食いつきを実現。飼育の安定化と給餌作業の効率化により稚魚の大量生産を後押す。

・「ノリのゲノム情報解析が進展」（9月29日発表）

ノリが高水温に曝された時に生体を守るために働くと考えられる 3 つの熱ショックタンパク質遺伝子を発見し単離に成功した。さらに、外見から全く見分けがつかないノリ製品を識別するため、ゲノム上の目印となるマイクロサテライト DNA マーカー候補も多数取得した。高水温に強い品種などの育種につながる成果。

・「魚類養殖の生産性向上に有効な遺伝子を特定～可食部位が約 2 倍になる品種開発が可能に～」（9月29日発表）

突然変異のメダカを人為的に作出して筋肉量の調整に関わる遺伝子を調べ、高産肉性のウシと全く同じ遺伝子の変異を持つメダカを発見、このメダカの筋肉量は、通常のメダカに比べて、体長あたりの骨格筋量（可食部位量）が 1.5~2 倍多いことを確認した。突然変異育種法を利用した魚類における優良品種開発に道を拓いた。

・「有明海のカキ礁で養殖カキ用の良質な種苗を安定的に生産することに成功」（11月21日発表）

有明海の奥部のカキ礁から極めて良質なカキ種苗を安定して生産できることを明らかにした。その種苗は①夏場に大量死亡しないこと、②夏場から身入りが良くなることなど、今までにはない利点・特徴を持つことが確認された。

・「メガネモチノウオの採卵及び種苗生産技術を開発」（11月29日発表）

メガネモチノウオ（ナポレオンフィッシュ）の稚魚生産に国内で初めて成功、8月に 22 尾、翌 9 月には飼育環境を改善し 537 尾と本種の稚魚生産を再現すること（世界で初めて）にも成功した。

○ 多くの学会賞等をいただきました。

これまでの研究開発が評価され、今年も多くの学会賞等をいただきました。水産総合研究センターの職員が今年 1 年にいただいた学会賞などをまとめてお知らせします。（別添）